寒燈夜話

小栗外傳 三編 五

へ13
3919
17

門へ13
號3919
卷17

寒燈夜話 小栗外傳 卷之十五

東都 絳山戲編

怨家を討得て孝義を表す

佛堂を再建して因縁全し

第九六編

此時結城持朝再びやうやうはゝ。事既にこゝに至るより何をか躊躇して遂に某が諫を聽て手のうちどゝ必ず腑を嚙の患ゆくんと述べ。持氏公長嘆して宣ひけるは我不明にして淫秀が諫を信じ。今日に至りて淫を〻臣汝が諫を拒むべきあゝ紀ども。危急の所に望んで淫秀が讒言の分疏をなさんとせば手足彼と共に亡ぶことを云はるゝとさもぶ命の惜きのゆゑ。罪を郎儻に負して和を乞ふ。聽病さよと。世の人口ふかゝらんと甚だ惜き事なりとぞや。斯のゆゑ有んこと故のごとく鎌倉の義領を做してもみる我を慢り。命なりちゆれ

早稲田大學圖書

渚侯おのれはじ生のぐらへく恥さんよう。死して勇豪の名代残さんを豈際うこ
のうびやと兼ゝ氣なめるのうちう。持朝呵ごうち笑ひこの物ゝ狂ひのうるや。
爾うまうこれ匹夫の上のういうで大名のえなとこうい今ゐ生害あるうらば。
不明不知とも人さゝさん。聖賢の君ゆて讒臣のみゐ。皆付不正のゝのわし。
甚非を知りを佞臣を罪。明君の名を全を。万民徳ゐ伏と。和漢ゐその例勘
かうび君今泉秀を罪。先非を改めるうんゐ。誰う命を〻三ゝさん基氏二世
地ゐ基業を立のゐ。幾浄の勤労とるおば。そを一人の佞臣のみゐ。彼さる
芸薬頼のゐらく捨のうんと。不孝とやいそん不明とやいうん。小事をもて大事を
誤りのひそと言語をそして疎やうび。扨氏ゐ漸ゆゐ耻ゝうもひくやうを
過てりく汝宜く斗らひ給と。泉涼あるゝ持朝喜び甲斐ゐ。某が言ゐ耻
さまゐ。幾浄の賜りのを知るよりも。遥場りて忝ゆと。泉涼感謝。それよりを

俄ゐ郎党ゐ命じ一色泉秀を呼び忽ち罠てりまりて泉秀ゆ化へ落ゐ
のひうん。陣中一人の人影をうんどと報るゐ扨氏ゐもこをゝを〻とめ。
泉秀が佞悪を憤りのゐ持朝ハさこをもくらめと不審ゆを。おのれがうゐ勢
をび鎌倉ゐ残して。扨氏ゐを守護のさしを。ゐハ僅ゐ数十人の従者をゐて京軍
の屯をる。武蔵国府中ゐ赴ゝ小栗が陳ゐ踵ゐ。斯と案内ここの当府小栗
助重を家扶持房とゆゐ憲実を故んと上州白井ゐ到るところ。猛勢ハ
京軍の救ひゐ及ばるゐ笑おぢ。一色泉秀同附家をて。渚ゐ海を拂て
引退るれば案ゐ相違。憲実ゐ対面。これより三ゐ一所よりのうて一色を
討ぶ。武蔵国まゐ生ゐるゐ一色ゐ毎ゐも鎌倉ゐ迎ゐるとゐ。
鎌倉ゐ押おくこ。ゐうりしゐど家扶ゐ小栗も泉秀をこをゐめと思へさとが
滝倉ゐ襲んと忍びうゐ躍ゐ。滝ゐ滝ゐ人ゐうゐ同国府中ゐ

陣取して居らるゝ処に只今結城持朝小栗が陣を来りたれバいそぎ詣り急だ
陣中に請じ入対面を互に一別後恙なきをよろこびさて持朝申されけるハ。
此回の一乱鎌倉殿のおぼし立まふ本ハあらバ一色詮秀が年来の悪行。
召ひ家杖憲実を遠ざけ給ふより発れり。去りたるに近日。詮秀が手ごとの悪行。
一時に露顕し。君ふかく憤らせまひ。其罪を糺んとせさしまふ処から彼方へ
致落失ね遠慮どの是を咲まひ。此身の不明を恥て生害あらんとすゝる。
某なんとかに諫とゞめまするありしこれ君を思ふのみならず。今遠慮殿失
ぬるならバ東国忽ち乱れ京都も危ふく天下の患ひならんよりも速に京
遠慮の心中に和睦あらんことを頼みまつり足下この陣に居たまふと聞て参り
来りてこれを議んとすと。不知足下が意奈何と問へバ。小栗喜んで云へり
なれハ。よくも心を用ひ給ふぞ。某も亦遠慮の世臣たるそ。昔清近習に

侍り深き鴻恩を蒙れり。一旦遠者のために御勘気を受れどいかで旧好を
忘るべき既に今将軍家の命によりて鎌倉へ押寄るも身のかく踟蹰て
此の遠慮殿に弓引んとの忍びがたく思へバなりこれ某がさきに扶杖もこの
意也然れどもみな遠慮殿の御勘気を蒙りしものなれバ心中のことを告べき
あるにもあらず。侍りしに足下のこゝにてかく思はせまふを幸し。我々が想ふ所をの
ことを将氏を告へ上まつるべし。両家杖よく詮議して和睦なさんと頼み参な
告でゐるに持朝かぎりなく喜びて忠義の志を感じたりその后助言を云へて
さらバ。某千辛万苦して将軍家の御免を蒙り今回討まふ時ひしハ父の仇
一色を討ちんためにありけるに去向和議をと告げ不見を猜量あれとやゝこ
なれバ持朝踏みさそわらん此ゆ深くる患ひまひて足下さらでも伴ふなん。
去年某女児を怪獣に取られしを足下が郎党の們我力を以て是を救へり。

其府その労況報ひんとをほゆることを辞し一色を討とをりて報へよと仰くう。
おのこと平日ふこと紙ふことを且び。おのこび戸ふ意し。藤倉よ至まるとふめう。
一色の雅ふうふく公を紙ざるとあれば心服のその況しく詮秀が出幸の中ふ
紙し入其動静を窺ふをふ京軍の勢ひ日ふ盛んふく鎌倉方ハ日毎よ
微しくなる況て武蔵国の陣を逃ま。持況堂村の賊桜山安秀ら汗ふ
忍ぶす。出幸よ紙ひ出ふるの立還く告知ふせり。斯こうを用ゆること前
の労を報んふ。御足下仇討をおのづ我案内をせんぞはよと忠くそなれば。
小栗大きふ喜ひ好きのほど感佩を郎蓮池庄司とこめ人ことと況軍
一殺よ出く。前言空しくふねを感謝せり。斯く小栗ハ家扶よ舎し村沼の
笑人ばることを出ふるふこる弄んで頃嘗ましらばは和睦速ふ調へよふ
ふこと家扶小栗の人く村沼よ使ひ藤倉よ跨り持氏ふ入ふとを

村氏ふハ不明ゆして人ことを退ふ者ふこを軟恢しの人ハ人ふも忠誠の至ふれを
畏ひふ。原来これ仁君忠臣の徒ふ互ふ仏解く。君臣ふ交壺の舎ふ
なしふ。それより不日ふ家扶持房京邸よ出幸。将軍家よ入ふしてや
ふ扶ハ鎌倉ふの今回のふ夢くハ意より半ふあふ。一色詮秀已藤ふの
執事ふふんとをおりハ家扶憲実を絶ふをふ。爾ふ京軍の勢ひ
強く藤倉方衝ふふ微しくなりしほどふ斯ふハ禍ふ身よ及んと孫よ出奇し
日ハ志意を通ハしふる相州の賊桜山ふの方ふ身況ふふはし藤倉辰
足を知ふしめ今更詮秀ふ敗北ねるを深く後悔せきしまひ出生害あん
とをふを結城村沼これを止めすいとし。某等ふ陳よ多ふて先非を悔ふはしを
笑えの某が父禅秀の亡びしも詮秀が滅て言ふ。藤倉辰の時ふ滅ふ
半ふあふねハ紙て知りぬ結城ふ云をゆふ村氏ふの出幸ハ傷ふふ汚ふ

三人相議して拓氏父の仇を系よりり尚ほ仇底を承ふ持胡ゲゲ〜ぐく。淫秀
とふ侯者の為み正しき仇も掩れさせまひ癖ととせにしまを差ひ臣。
足利どの君今逼金み在まさびい東國忽ち乱れ世八合戦の街
とるくん孤くいに和睦あつく故のぐく水奥の中と成まわ天下の大事
何かこれは去んと伊へまくをれば斯波左兵衛義淳に側み付ひ名ふ。
家扶拓房ゲゲ進を生くゲゲほい基嚮ゲゲ〜い只今拓房ゲ伊え上
処し速ふに許容あるべしと諫ゲ せば拓軍家も実ふりとおば。則ちは和睦
あるべれに去を拓房ゆ賜りれば大ゲ喜び感佩ゲ 塙をほ書を袖ゆ〜くらそぎ
遽参まわり拓氏父ゲ賜ぐくとれば。ゲて足を覗しるゆふ甚懇なほは和睦の
書ゆれば喜びおばとて大ゲとゆふば西ゲ向ひく思を謝し。人くもとれ氏示し
ゆふゲ〜ゲ斜ゆふば万歳を唱ゲく祝しゲ。かゲとれるゆふ及ぶも持胡ゲ

忠誠ゲゲりと恩賞の地を数多ゆゆり。家扶憲実胡い故のぬく。執ふゆ職ゆ
復し。家扶拓房小栗助平ゲ父の仇を絶秀ゲ対の后本願安堵きとべきゆ
旨命あれば。みる喜びく感謝せりとてゲ小栗の此序をりて兼照夫ゆ拓山を
討さ〜く。此ゲ〜ゲ上ゲるゆ何ゲ若しば陣中へ伺ふべと承ゆれば。ぎくらが
く家扶拓房ゲ相議し小栗い追ゲ家扶い猶ゲと定めその勢数合五百
余騎。永享二年九月中旬相州鎌倉を立く。同國太任の府ゆ着ゆり足
より横山が居をトし。稔現堂村へい三里ゲ足ゲ〜ゲ道なれども昨日より降そぎ
降りて路次悪しゆ殊ゲ夕晩ゲ及べば伺るゆも便り悪しと太任ゲ陳ゲ〜ゆ。
初更の頃ゲひより天色晴ゲ〜り。皎くゲる月のさ冴けさい白昼のぬくゆり。
小栗い今宵敵の虚を討ぜと後夜兵ゆ助高ゲて拓房ゲ陣ふ夜討の
ことを云ゆしゆ拓房も小栗と同じく夜討をかけんと。ゲとも便ゲ小栗ゲ陣ふ

小栗卷之十五
將軍家
時勢を説く
義淳講和を勸む
新渡義淳
小栗卷之十五

すゝ〻るあゞ。途中みゝく女使行遭ねゞ女大将の意同ゝとゝとび互ふ主命を通じ。各陸よ立還りゝこのよしを報ずれば。斯まで符節を合てごゝと死。出陣の吉兆ありと大将も士卒も喜びあひ急ぎ相況堂村ゞ赴ゝ々り扱又横山安秀ハ鎌倉殿京都よ報きゝふは一色が許より告来ゝれば限なく喜び。こハ我身用運の時至れり。急ぎ一色よ加勢まゝと國〻ゞ散在ゝ佐所の部下どもを招くゝ。既よ一千余騎よ及びゝ兵ゞの勢力めゝんよハもろ強しいざや絳秀よ加勢ゝ。奇功を立ゝく。鎌倉殿の仇を報り故の所領ゝ安堵せんと。殆山塞を出んとする所ふ忽ち一色絳秀腹心の郎党僅よ六七人を扶て。權現堂村ゞ忍び来り。漁倉の光景を物語誓付忍ばゝめられとあるよ扶山案よ相違ゝ。斯ゝくハ我身の浮沈ゝ。ひめくんとゝふよ。京都通倉ハ和睦ありて小栗家扶ゞ大将となりゝて此地方へ討ゝ来向ゝはし。佐人ゝ〻ゝ大きゝゆ驚ゝ。

今又逃るゝも脱ゝ沼ゞ此上ハ運を天よ任ゝ討ゝ出ゝ受とれと戦ひ。うち勝ゝもとゝふやどゝくゝ今の世の人心ゝ住ゝ小栗の栗ゞ佐ゝ又稗ゞ付定めゝく。彼方此方とさゝよハ。諸國の大名のうちゝ味方ゝ佐りの分ゝ佐はゝゞ。然るとゝ絳秀より。鎌倉殿ゞ佐ゝ謀叛をゝ〻ん京都ゝ傾くゝんゝ中ゝ平ゝ仇只我ゝめゝ。いゝる大国ゝ領せんゝ。心のまゝゝ。とゝれゝり予世ゝとゝゞめ。部下の悪徒のうちゝも称津今夜又浅草舎名ゝ天高軍吾。南宮山行方丸相模鬼王丸蛾門太郎。同次郎。能川入乃同十郎を宗徒の人ゝ。ゝ勢ゝ合一千余騎。相況堂村の塞よ籠り。近郷の地ゝ代官を夜討ゝ。今浪米穀を掠ゝ。兵粮の料ゝ准備十分ゝ考ゝ討ゝを行ゝ。小栗家扶の勢太任ゝ陣ゞ〻ねゝ豫ゝ斥候よ出ゝ。ゝ〻ゝ処の歩卒還り来ゝて報ゝれば。一色をゝゞ兎模山の眷属うち集て浮滅

ある時は撲山太郎班を出くりて敵の案内を知らざるうへ。いまだその
備整ふまじ。今夜逆寄にてこれを討ん。雖卵を破るより易からんと人々
言何おぼつかなしと湾うふ述べれば人々世議紛々べしと言へども既にその准備
ありさんとて次郎安春が兄左衛安副ありて陪臣の故をもて怨を懷けば。
其中平生睦しからぬ今世浮滅を生る道理なれば兄が功を奪れん
ことを妬こと同く席を進ませ太郎度の宜ふ処その謀ありれども
甚危しと奈何とすれば凡夜討朝うちするどいふ寡をもて衆を破る
術なれば今回のことは是より反を味方千金錦の多勢なり敵は僅に五百
騎と雖小勢なれども此地方を向ふもどのりのいうでもあるこの
心猛くふ敵を挫しく逆寄せば必ず落ち陥ること大なる彼をとん初度
の買ふ打負ば味方の德きはめて始終の防戦あるべき只堅く守り

敵の衆と窺ひこれを討ん方なくまでと言巧くもけまで衆とこれを惑ひ且
小栗が武勇を恐怖まで遂ふ次郎安春が異ふ人ふ随ひ夜討の義勢を
明日敵手壺ふ防ぐべしとて何の備もなきぐ伏ふ傾く運の来なんとり。
去程に小栗判官代助重ふ家扶村房と約を定め撲山が山塞ふ至りて時
既に二更ふ及びぬ。撲山方ふ明日ふ敵の寄るなれば德きふ今夜斗ゼ。
酒と飲ぐ酔ぐ睡べしと甲夜より大ぶも士卒も酔ことて熟睡をれば討手
寄せられど知らぬ顔ふ小栗ふ塞中静ふ物音なく不寂寞ふ光景
を窺ふ後背の方ふ高く山聳ふり前ふ平地なるを深く堀をわりて搭を
掛ぐるが是ぞ城門ふたてうけ置りこれふ塞中より討ん出ふ防急ふ
搭を下ふかうけし恰是固の城ふ天ふ小栗ふ堀陸を彼方此方を
見ぬり池在司を招ひくふ汝平生水陸を切ぬり此堀を越ぬ對ひの搭を

渡さんとせしとありけれバ庄司早くも堀際に至り橋を引たる処を見て渡に。
その間五間ほどもあらんと見れバ堀ハ水より一丈余も切岸なりし天を
仰ぎ見るに此方の大樹と彼方の大木と梢の枝を接へたり庄司これを見るより
より急に彼木に攀上り梢の枝を伝ひ。あんなく對ひの岸に下り立ちて只是
猿猴が梢を伝ふが如くなれバ何条なくとゝまるに彼引たる橋をおろしかけ。
扉を開ひてさし招たり此橋ハ渡る人ありせバ二三十人ならずとも動かじ
ゆるぎ無只一人の力なりて容易下しける庄司が力の程ぞ目を驚すばかりなり。
小栗太郎ハ庄司とぞ今夜の一番乗なり。続けや人々渡せよやとて下知を
なしける其続きの者ハ橋を渡せバ誰かとれに後るべき我劣らじと渡りけれ。
此うちにも風間後藤田辺の兄弟ハ庄司が比類なき先陣に我々も後るまじと
空中を走らんと六人の人々一散に門の扉に手をかけて曳々声して押たりけるが。

さしも大きなる鉄門なりしが。無双の大力六人して押けれバ忽ちくだけ
ぞ生じ。終に貫木おし折り扉ハ八字に開れけり。この物音に熟酔してゐる桜山
方の者ども醒て慌忙きやうやう夜討の入たりと弓よ太刀よと立騒ぐ。叫喚地獄
の罪人が呵責に逢ふもかくやあらん。此時搦手にまはりし家来等房山上より
寨中の光景を窺ひ居りしが。俄に立騒ぐ。門の沸かへるなれバすハや小栗
責入りしぞ後れをとりそ人々と。甚身共先に山をかけおりべくその兵ホなだれ
躊躇べき一時に寨中なる入て鬨をどつとぞ揚たりけり桜山方ことごとく又
かゞやきけれハ乱れて我先にと逃んとすさまざまに家の徒の人々ハ敵とて小勢なれバ。
長途を来れバ然とも多勢ものあれバこつんで討るれども入る勢を二の木戸に
支へたり小栗が郎党後藤ハ兄弟ハ諸軍に魁し二の木戸に入んとする賊ね
称津今夜又浅草金五名若大島軍五郎おりあひて防ぎけるところに。

間もなく八風爾次郎正貞横合より責かゝる勢ひ猛ふ今夜丑とゞ一下絵
突伏さり。舎弟の軍吾の女人おまつ勢ひ救ひんとすゝを浅茂兄弟刀を抜
踊りかゝると人々しゞ。賊将二人枕をなゝめ討さり。かゝまれ二の木戸
なんぞく破れ家枝小栗の勢ひ一入り斬さゝる。横山太郎安嗣同次郎安春
此二人まで兎角相模鬼三蛾門兄弟熊川父子組みきゝ
さる宗徒のもの。此所を討さ彼所を討さ今ぞ命のもなし。ちらさども
横山安秀と一色詮秀と討さるものゝ。しかハ漏やとちこちろ塞外の陣ふ
照天姫笑登小太郎。片岡兄弟青柳を引ひ一色ゞ忽ち使をとりて云こゝ
我く塞外ふあつて義の兵を寄ふ処ふ雑兵の中ふ紛れ入れ老兵の仕しと。
生捕ゝくるふ安秀ゆてゆくいでもくひゝとゞやとあるふ小栗家枝の
女房斜ゝ及び女房ゝ及び安秀ゝ照天姫の父北條氏綱ゝ。涌金

殿の御免もあれば。姫の幼ふ仕ゝるべしとあり。小栗これを聞ゝ甚
使ふ分付て還ゝ。照天これを父て大ゝ喜び則ち横山を斬ゝ
小太郎ふ命じて郷を解し。容貌を正ゝ
今ハ天を共ふ戴せざ仇の讐なれば畏れども只今此所ゝ討ゝ
われとゆめ〻ゝ青柳もまゝ進ゝ出ゝ人ゝ
ともあんこを仇と怨ゝ。縁故を知ゝ甚あゝ
奴家ゞ父ハ道外ゝ。ゝ光の下僕ゝ。
時ふ法師ゝ。ゝ底のみゝとなるべきを辛ゝ脱ゝ出
姫君ふ生まゝ主家亡び。ゝ行
よゝ。何方までゝ在家を尋ゝ甚ふ奴家を售ゝ旅用と
なゝ相模の国ゝ至りふ不図あんふ捉へられ馬の秣ゝ飼ゝとなゝ

折からに小栗は走寄りて。我の頭を委しく申上げて没命せり。ここにおいて
仇とれと云ふがまゝに。おもひきれおよそと涙とともにいまはの横山安秀は。
最前よりしてさし俯きゐたりしが。何思ひけん立あがり側へ来
居たる雑兵の短刀奪ひ我と我が左りの腹に突き立て。ぐつと座して照天に対ひ。
いと苦しげに息を衝き。姫青柳は女にて身を殺しても孝行なり。さるからに根を
定めならば我は男に在りながら恩義を忘れし不義となると身の罪を恥ぢ
るや。思ひ出せば一昔。応永辛卯の三春。名武が庭にて助幸と照姫を争ふ
射損じて我独り助かれば。小栗が如く思ひしに名光彼が才を愛し。
娘をもつて許嫁を我仇とおもふ其人を害せる其の腹いせに。それより名武を
小栗を恨みて名光を我手に殺し。又小栗を讒害せり畢竟邪なる心
より善人を殺しより其後は我子の愛に引れ。よしなき悪事をなしたるが。
天罪脱れがたく。一時に子どもは兄弟を殺し。現在姪の手に捕られ。六十年の非を
知て後悔するに甲斐もなし。姫が為には讐なれども。さすが伯父の名にめでて。討捕する
をとめやと我自殺をなしたるぞ。これは我身の先非を悔ひし心を善に翻さん。
せめての志なるぞよ。いざ此首を討ち取られよと照天に今さらに然ば
善に改めし。叔父は父の仇なれども。討ち得ず躊躇ふは。安秀声を励まして。
甲斐もなき照天姫。それの義勢は浮りにて。此期に及び臆せる歟。うぬしは
我が若痛さに。かぶり殺ふさるならば。然れば我が首を実に刀を右手にぞ振んとするを
照天これに心ば励まし。いふ伯父なれ共是を父の仇なれば世は畏こけれども
此首を賜はりぬと云ひても長刀もつて雄々しくも後ろに斬かかられ。
憐れむべし横山が首は前に落ちにけり。此時そばに在りし青柳免と家り一太刀なる。
怨をさしてこそ中れば縁くの約を易ゆべけれや。さても照天が不知なる青柳

小栗夫婦讐を討得て切腹
金王
横山首級
照天
庁岡加二郎
庁岡加三郎
長尊六郎
田辺平八郎
後藤兄弟
沙庄司
小栗助重
田辺平八郎
拝行上人
家杉持房
結城持朝
青柳
一色詮秀
小栗卷之十五

喜び玄あり。刀をねひく樸山が厳とこそ刺しうりけり。此附照天は孫そうり。ひうけ置く所に母父の神主の前に樸山が首を供へ香を焚南無父の霊さへ安せ手向の仇安秀と今日只今討ぶくまを向のくべ徒弟の若頼を命れ成仏得脱し多人と懐舊の涙せ死めさ念仏数遍唱ゆまで昔柳も情中うり。亡父道仏が神主とせ。小ろ死所よ居おきん涙ぐくふ云りうん怨家樸山安秀どの八奴家が力ふ及ばねを姫君父の名信と深く懐みまふうふくく今仇を討さーまひね手次の五念仏晴げて速よ成仏遂さしまんや有五幽霊拝生菩提と念ぜとうくーが樸山を刺くるり刀をとり来ー。我とうが手に怒ると。ふうけとと切れば人くん。ちりくふうふと強るひうり。青柳涙ふ拭ひ。奴家が身ハ、ふくく。ふ憂恥ふうまば速よ死をべ死なれどもなをハ一ッを父の菩提のゐ。又二ッまハ怨家ふべふ。樸山どのハ仇主人の由縁の人よ在ふ。雑又宝卵ふ

善ひんふなりまひくとなれば。仇よるきんも本まるふ絵べ。七絵吊ひ仕ん。とさてこそ親玉ハ変なれと。語るを父く姫をとーの。人くこまを懐みまを。此ちひも賊塞俄よ火発ふ。織くとして燃られハ美登小左衛尉を。ふを照天ふ對ハ賊既よ亡ぞねとおぼまをハ。ふ大ゐをどなくふ凱旋めるべ。と云も絵くざるふ小栗家枝の友ゐ。ま勢引仕ーまられハ照天笑尼長ふをゐて出迎へ引率て陳中ふ入じめ。ありし雅ふくを祥ふ述横山ふ効首勇ふ入まーふば友将その効を賞ーをはもおのぶ仇一色を脱逃ると悔る射ふ。結城右衛一色注秀を郷め。此陣中ふ牽まり。小栗ふ遭ふ。ひうりを絵ハ。我ま下が前営まふ一色注秀を討ぶんと絵ーてれば前よ注秀武蔵の陣を出奇の成も。その去向を窺ふーて亦在を告ね。今ふく此所を逃去んともあくんと。蜜ふまを勢をふ立ち逃を生ぶて地方よ埋伏させふ。

果して忍び寄るを絶ゑ捕へくくふ事なり。是前の言を背ざるなりと。
淫秀を小栗より召せば。助重天晴地に喜び。是ひとへに上の信義なり
よりて。手次の素懐を遂ずして。此恩のみ忘れ難く感謝を述ぶ。
お房を對ひくやをかう。父の仇結城の好意なりて手ずの仇
捕ずして。足下も我も恨ハ同じ怨家。いざ諸ともに討んとあるお房
辞して。のりを捨ハ結城の一色を生捕しハ。是こそ足下のなさし我卿も
功なれ。いざ足下一の太刀を。討べしとのべた。足下一の太刀を。我
二の太刀を。と。譲ると再三再四及び。今ひとて助重一太刀を
されハお房二太刀を下して。淫秀を三断とハなしぬ。両将を首として各
父の霊を慰同数手の本懐を遂感涙の涙ふしぜびて。ありけれバ。
凱陣して。今日のみ鎌倉殿へ凱歌へ。既に陣を引拂ハんとて此夜を

れのくと明てけり。朝霧晴て向ひより。森沢寺の拝行上人多数として出
来ぬ。人くこと足ハと喜ぶもの。小栗まぬハ上人のそ。道恩を忘れバ。
人より前に進を出今日仇を討ことを述。これ上人の道徳ハ恩を
謝をれバ。上人も喜びの人くの勲功を賞して。さて今ハ負道熟ハ
人各命のりて命に逆ふ者ハ亡び。命ハ従ふ者ハ栄ふ結城家の人くハ
東国に在て吉く。小栗の人くハ渾東国に産をれと。東に在て吉ふ西ハ
却ひく幸ゆ。そを奈何といふに。初め相模中て夫婦離散せしと。笑ふ
行て再会せり。再び東に帰ふ及び助重奇疾を稟賦天股肱を失ふ。
我言に隨ひ又西に病平愈し。夫婦本懐を遂ふ至る西に居をトめバ。
富貴を栄く子孫を保せん。さて又告知ひ申べきを。ひとと結城の
まぐ総角の七昔。さくめぐ谷の祝音堂にて。樗化の翁に舎て説法しるを。

滝業公ゆゑへあり一色側に在りこれを以て結城の切を奪んと僞を構
公を惑はし。小栗と名武とをして記音堂を毀ちね君命とハ云ながら佛
堂を毀てる冥罰忽ち報ひあ家行に亡びぬ親男の為をゆゑ谷
の記音堂を再建し孝芸とれまるべうぶと説ゆゑれば小栗助手ん
教さとゆゑ。鎌倉殿へゆへ上速ゆ再建さべ。さて又上人前に示し
我くが対西に在て宜しとあれば此後西国に赴くべ。然れども某を初め腹心乃
郎党十人ハ東国の産なるゆゑ屍を東ゆ
下ゆ一大の坑ありと仰せり。其ゆ我くが警の端を切てこれを絶めば東ゆの土ゆ
なほ相しく且ハ仏に因縁を結べば。現當二世ともゆ安うん曾さて某横山
が許に至りし時。鬼綱の馬をりて害せらるんと。かくて是よりく照天沈
妻をとることを得ざり。生捕箱根の危難に鬼綱が助にあらぬば生命全を

得るし馬の死ゆ望こと馬に記音小奈んのを得るとれば。彼堂の本尊ゆ馬に記音
を安置せんこと奈何あんと仰せゆるべ遊行上人大ゆ喜びて宜ろくしなり。
さらひ青柳をりて其堂に居しめ朝暮香華を供へめば是宜ゆ非ずや。
とゆ人〳〵上人の恵を感激とゆ。ゆゑて青柳ハ上人の徒弟となり名を
青柳尼と称ゆり。助く小栗結城家枚の三刀を一色横山の首級を携へて
遠会ゆ還り。持氏公の実検に成るべ。其功を賞し名恩賞の地を賜ひ
其中に小栗助手ハ在行上人の示ゆ従て仰せ頂に搗く。さらめば公の
観音堂再建のことを請ゆ。其ゆ中ゆ小栗ハ去びて自ら
行ゆ堂を営む。此時助手ゆ後十一人の堅ゆの末を切く。彼坑の中に猶ゆ
ゆ。是前に説ゆる此坑ハ新田義興主従の霊を封じゆ。堂を毀る時
再び世に出く。小栗に後と生れ出前世の因縁によりて今此坑に君に十一人、

髪を納めゝ侍ぞ不思議なれ。形て日あゝどて佛堂再建の切なりしゑ縁と
ゆひりうけさるなれが馬頭観音を安置し。拝行上人を請し導師と供養
をなすとふ扨氏子どもの涌谷の半残群集し。結縁をゐよりて后ゐ御尼
ぜ此堂ゑ居らし仏ゑ仕へさしゝり。夫より小栗ハ涌谷殿ゑ暇をもし京都ゑ
登り扨重家の足軽ゑ入り一色横山と討し首し。訳言堂再建のゝ
詳ふ笑へ上しゑ扨軍家まも感あゝく丹後國峯山を賜りそれハ助を添く
給る恩を謝し。夫婦りゐ共ゑ郎党を俱し。新田忍の地ゑ下り十人の郎党ハ
恩ぞ分ちゑへ夫婦君ハ道と楽しみ政正しゝり行ゑ峯山ハ民をさゝゝく。
近郷の国人小栗の德を慕ひ丹後一國静謐ゑ治りね甚后小栗照天の
間ゑ男女の子ども数多生まいと目出ぢ栄えゝり。

小栗外傳卷之十五　大尾